

大正四年五月十日

白雪乘組海軍中尉 後藤鐵五郎

白雪驅逐艦長池田武義殿

野分白雪驅逐艦 關元始末書

一、當時當直將校 海軍中尉 後藤鐵五郎

二、日時及場所天候等

大正四年五月十日午前五時五分

於北緯三十三度十分東經百二十七度三十分

天候晴 海上模様波浪下り

風向風力左舷艦尾 一一二

三、當時狀況及當直將校採り處置

隊形利根、兩斜後、第四隨隊隊形但之三番隊、二番隊、後尾

海軍

0753

二續航不

航行東方

十四節

針路

北七十五度東

野分白雪距離二百米

白雪操舵及速力増減器指度

野分二續航を為すに常ニ速度より十度内外操舵ヲ要シ速力加増

減器減(赤)五ニテ少シク近半減(赤)十三ニテ少シク後ハ状況ニア

リキ

右状況ニリシ三年前五時四分頃ニ至リ野分ハ急ニ右舷ニ回頭シ始メ

一番隊二番艦初霜ニ近寄り左舷ニ回頭シ初霜ト漸次平行航行

セリ白雪艦宣候原針路ヲ航行ス三年前五時六分頃ニ至リ野分左舷ニ

回頭シ始メ白雪艦宣候速力増減器減ニ由轉ト去野分急ニ左舷ニ回

頭シ白雪右舷ニ突進シ來ル白雪面艦ニ操舵後間至リ

0754

白雪右舷士官室附近 艦橋の僅かに艦橋を激動し 覺は野分白雪艦
 尾を過り去りて以て取舵一杯原針路を元
 右事件發生と同時に艦長先任將校は屈し又當直下士に損傷
 程度を檢せし外 飯の多少の凹部を生じたる浸水處あり航行に差
 支なき確たるを以て其儘原針路を復し航行す
 四度置針の理由
 野分突然右舷を回頭し其分舵機故障ありと思へり 續いて野
 分左舷を回頭し始るに列を以て考へ速力を減じたり 然るに左舷を
 回頭し公下より急激に回頭し來り此時白雪取舵を取り逃しトス六
 既距離短過せし以て却つて白雪の艦尾を野分の艦首に振り向
 け不可なりと思へ又停止後進するも情力を多少前進し免れ去
 り本艦中央を野分の艦首に待たせ置る如き状況下より何れも
 不可なりと思へ断然原状儘航行し續いて野分艦首を通過し若

毎
 日

之艦尾觸衝處下よ半面舵ヲ取り觸衝ヲ免カント判断日前
部處置ヲ取りタリ

海軍省

(終)

0756

別紙第三

海軍

大正四年五月二十日

近藤艦隊分白雪接觸事件 加藤佐世保海軍工廠検査官
査問委員長殿

驅逐艦損傷箇所件

驅逐艦分白雪損傷箇所取調候別紙通り候

右通知不

(別紙一葉取見取圖二珠付写真略不)

紙

0757

驅逐艦野分及白雷損傷箇所取調報告

野分ハ真及兒取箇ニ見劣如ク「ステム」ニ少ク右舷ニ曲テ右舷水際
附近ニ僅カク鱗裂ヲ生セルニシテ内部ニ何等ノ損害ナシ
白雷ハ右舷室右舷側少ク窪ミ水際ニ於ルニ銜接部ニ間隙ヲ生シ
少ク浸水セリニシテ「ム」及「肘板」曲ルニシテ他ニ異狀ナシ
損傷箇所修理費豫算

野分

工費 二〇〇円 材料費 一五〇円 附属費 五六円 計 四〇六円

外入渠費 工費 一〇二円 材料費 三四円 附属費 六〇七円 計 五〇七六円

白雷

工費 一五〇円 材料費 一〇〇円 附属費 四〇円 計 二九〇円

外入渠費 工費 一一二円 材料費 三三四円 附属費 六四六円 計 五〇五七六円

毎 尾

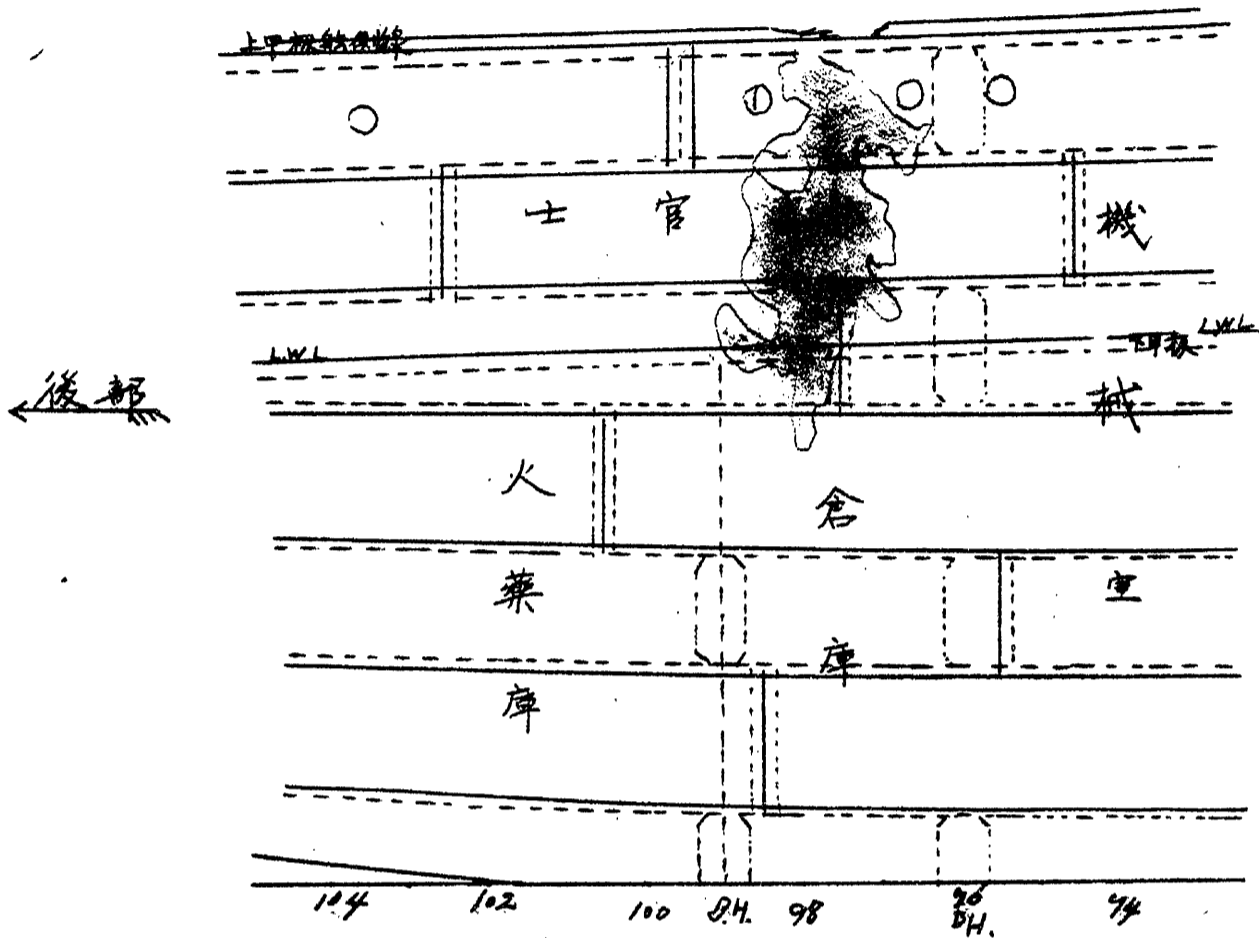
0758

二
幸日敷
兩艦共
七日間

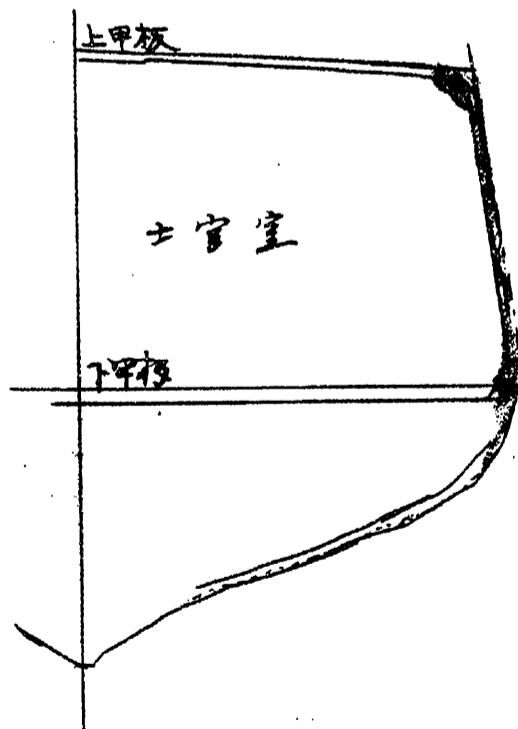
終

0759

右舷側面



肋柱98-97番間切斷
前部方向見し



驅逐艦白雪

破損箇所見取圖

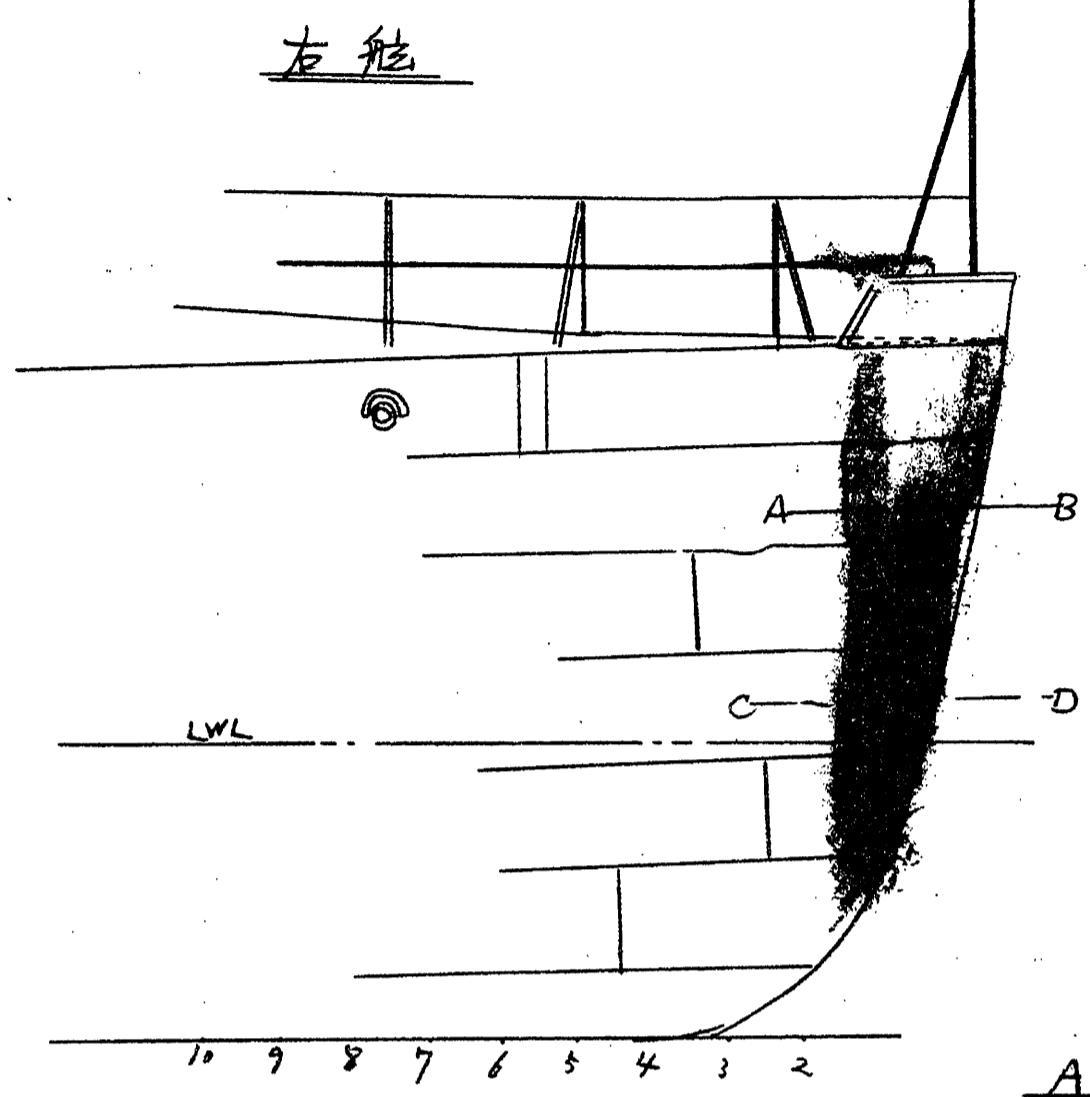
縮尺四分ノ一吋ヲ一呎トス

大正四年五月十一日午後見取

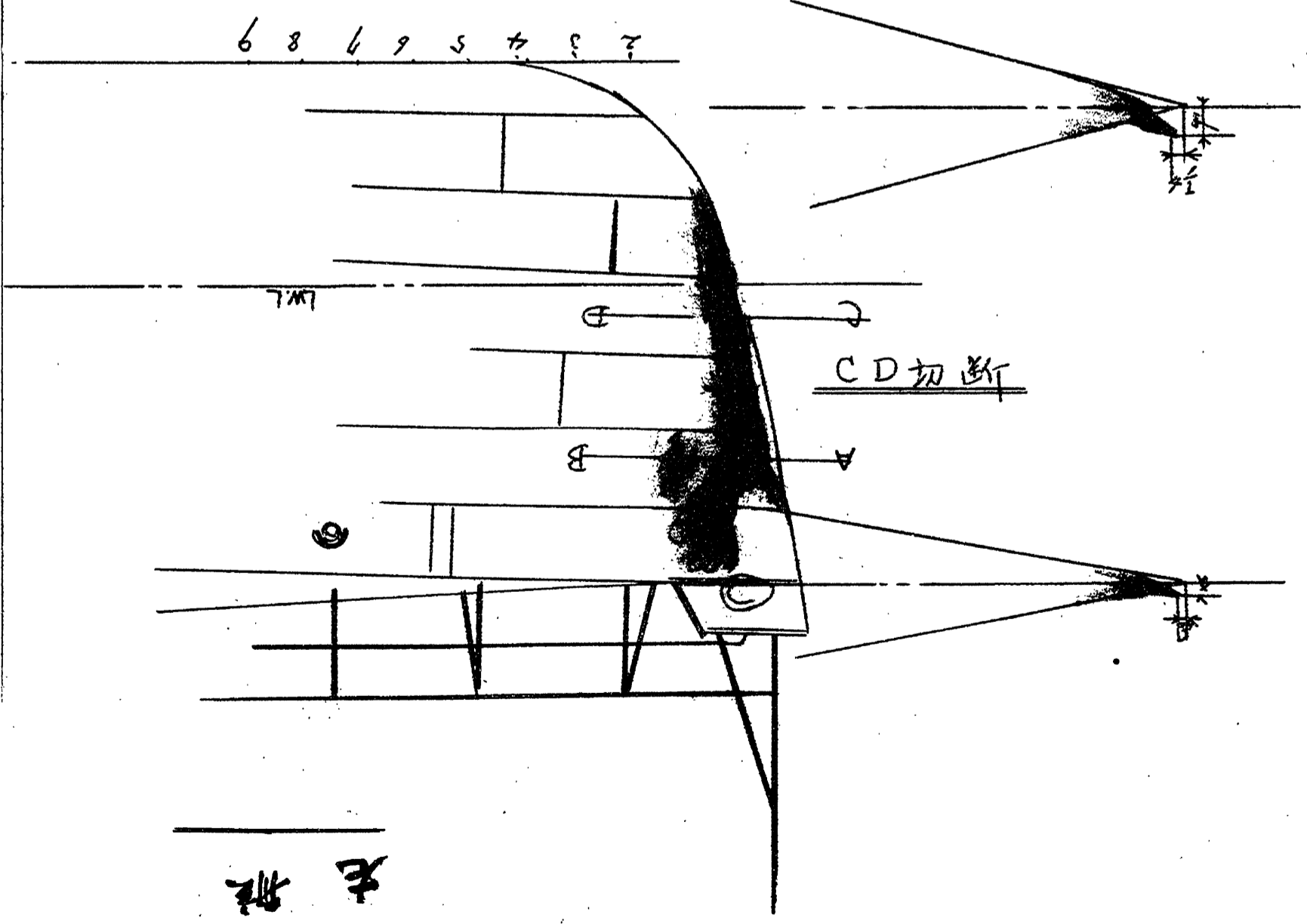
駆逐艦分破損箇所見取図

船尺五分一

大正五年四月廿日午後見取



AB 切断





CD 切断


別紙第四

大正四年五月二十日


査問委員海軍主理 染川源之丞 

全 海軍大尉 北正一郎 

全 海軍少佐 森本克久 

全 海軍中佐 横地錠二 

全 海軍大佐 吉川安平 

査問委員長 海軍少將 近藤常松 

第三艦隊司令長官 名和又八郎 殿

野分白雷觸衝事件ニ関スル別冊査定書並附屬書類

右進達ス

0762

査定書

一事實

大正四年五月十一日午前六時英二水雷隊、馬鞍群島錨地、英九驅逐隊、野介、白雪、松尾、船行序列ヲ以テ旗艦利根、左斜後、英四隨伴隊形（但し英七驅逐隊（三番隊）、英九驅逐隊（三番隊）三續）概也。即速四節針路北幸五度東ニテ佐吾保ニ向ケ船行中同月十一日午前五時野介艦長海軍大尉初田甚三郎、當直交代ノ爲メ同艦ヲ交リ當直將校海軍中尉日野昇一ヨリ未ダ四圍ノ狀況等ヲ聽取セラルニ先ケテ午前五時四分頃同艦々首約二點右舷ニ回頭セルヲ認メタルヨリ直ニ取舵レテ令シ定位置ニ執ルメントシテリ當時恰ニ當直操舵員掌帆兵海軍等水兵奥榮之助ハ下刺ヲ催シタル爲メ傍ニアリシ當番海軍等水兵中島愛之助ハ臨時交代ヲ依頼シタル儘當直將校其旨ヲ報告スルコトナクシテ上層シタルヨリ中島一等水兵代リテ操舵シタルモ同

一

二

0763

人ハ技術未熟ノ者ニテ且ツ當時海上追波アリカ故適當ニ操舵スル
 マトヲ得ス爲メ同艦ハ面舵ト偏シ右翼列ノ先頭ニ在リテ並進し居但神風
 ニ向ヒタルヲ以テ同艦長ハ操舵員ヲ交代ヲ命シ同時ニ取舵一杯ト令セタリ
 其際海軍三等兵曹繁田虎彦當番交代ノ爲メ艦橋ニ來リタルヲ以テ
 中島一等水兵八回人ニ操舵ヲ譲リタト云 繁田三等兵曹モ亦操舵術ニ経
 験ナカリシ爲メ艦長ヨリ取舵一杯ト令リシヲ拘ラス誤テ面舵ヲ取リタリシカ
 當直將校ノ注意ヨリ直ニ取舵一杯ニ操舵シ右翼列ニ番艦初霜約
 五十米突リ~~艦~~於テ漸ク並進スルヲ得ルニ至リタルヲ以テ同艦長ハ~~口~~下令
 根~~部~~艦尾ヲ正備・凡テ更ニ~~口~~候ト令セタリ然レトモ同人ノ同意ノ結果艦長
 人全ク力加~~メ~~同艦ニ操舵スルコト能ハス爲メニ番艦白雪ニ接近スルニ至リタ
 以テ同艦長ハ直ニ~~口~~面舵一杯ト令~~メ~~當時右舷機軸ヲ停止セメ續テ~~口~~
 機ヲ後進原速トセシメタルモ尙前進情カアリシ爲メ尙前五時九分推測
 位置北緯三十二度五分東經百二十七度三十分ニ於テ同艦ノ艦首左舷側ヲ

11
 11

0764

以テ白雪士官室右舷側ニ觸衝セタリ是ヨリ先々白雪高直將校悔軍中尉後藤
鉄五郎、野介ノ接近シ来タヨリ「面舵一杯ヲ令シテ觸衝ヲ避ケント企テタルモ時
期既ニ後ク之レヲ避ケル能ク為メニ両艦共各修理費約五百五十四工事日数
七百ヲ要スル程度ニ於テ損害ヲ受クルに至リタルモノナリ」

以上ノ事實實ニ有田英九駆逐隊司令心得、初田野介駆逐艦長、池田白雪駆逐
艦長、後藤白雪高直將校等ノ各報告書及ヒ本件因係者ノ各陳述書並
ニ西郷逐艦長航白日記、機関日記、加藤佐世保悔軍工廠検査官ノ回答書
ヲ綜合考査敷トテ之ヲ認定セタリ

二 原因

本件發生ノ原因ヲ前記詮馬心ニ照シ且有田英九駆逐隊司令心得ノ提出シ
係ル同隊軍紀風紀教育訓練並ニ一般服務ニ関スル實狀報告書ニ徴シテ
案スルニ司令心得カ精神教育ニ重キヲ置テ軍紀風紀ノ振肅ニ努メ教育
訓練及ニ一般服務ノ改善ノ意ヲ用ヒタルノ跡顯著ニク之ヲ平素同隊内軍

規則、廣種教育訓練、亦亦令及一般服務、文學、藝術等、固由之、
ト認ル能ク、從テ在揚ル事由ニ基テ、偶発的ノモト推定セラル得ス

(イ) 操艦員カ其ノ配置ノ場所ヲ定ムル方リテ、次直者若ク、他ノ操艦員
ヲレテ自ラト交代セシムルヲ執務中偶下痢ヲ催シ上廁スルカ爲メ操艦
ノ技術未熟ニシテ而モ其ノ配置ニテラサル當番ト交代シ且之ノ當直
將校ニ報告セサリレト

(ロ) 艦長カ當直將校ト交代セトスルニ方リ、固有操艦員カ操艦シ居ラハ
ニ氣附カス唯艦ノ偏移ノ大ナルヲ見テ取罷ヲ令シタルモ、其編移益
甚トキニ至リキ、艦ヲ固テ操艦員カ操艦ト從事シ居ラハ、ト知
リト雖モ、兩附近ニ操艦員アリテ監督シ居ルモノト誤認シ、操艦員
交代ヲ命ジタル却テ未タ當テ其術ニ経験ナキ當番兵ト交代セシメ
ル結果ヲ生シ、其ノ努力モ水色ト歸シタルニ至ラズ、偶々テ觸衝ヲ未然ニ防
止シ得ハ、緊要果斷ノ所置ト出ル機會ヲ失シタリト

0766

三、責任

(一) 有田司令心得責任

本件發生原因、既述ノ如ク、平素隊内軍紀風紀ノ廢壞、其他教育訓練不良ノ点アリタルカ爲ナリト認ムルコト能ハス。雖モ司令心得ノ兼修ニ於テ、偶々員不規律、甚テ觸衝事件ヲ生セシメタル以上、司令心得モ亦監督不行、屈ノ責ヲ免ルル可キマラス。然レトモ懲罰令依リ制裁スルヲ要セズ。唯將來ヲ戒告スルニ止ルヲ以テ適當ト信ス。

(二) 野分艦隊長責任

(1) 操艦員カ自己ノ職責、極メテ重大ニシテ其服務規定ヲモ熟知シテ、且テ固有ノ配置ニアルカモ亦熟ノ者ト交代シ、即カ之ヲ當直將校ニ報告受テ、備番カ操艦ノ経験モ乏キニ拘テ、慢然己レヲ信シテ之ト交代シ、重大ナル自己ノ責務ヲ輕シテカ如キ形跡ヲ留メ、施イテ艦艇ヲ觸衝セ、且テ此等ノ事、縱令當時如何ナル事情如何ナル動機アリレモモ、艦長トシテ

却下り醫務指導 職責上共首ヲ為シテ海軍總司令部
條案ニ依リ該當ニ依テ懲罰處分ヲ付スル通書ト認ム

(四) 艦長カ艦橋ニ上テ都度一人員ヲ調査スルカ如ク救急室ニ行ルノ常套
事ニアルガ故ニ其操舵員ノ誰ナルヤヲ確メサリシ事ハ素ヨリ答ムヘキ
アラスト雖モ其一モ艦首ノ形極移ニ依リ操舵員ニアルカ一水兵ノ形極
ヲ握シテ氣付ク從來未ダ曾テ之キ一ノ異常事實ヲ示シテ
以上更進ニテ現状ヲ急査スルヲ以テ當然採ルヘキ順序ナリトシテ其
結果操舵員カ附近ニ現在を忘テ知り得ハ適切正應急手取ニ自ラ
理ニ生ズキカ故ニ其禍ヲ未然ニ防グ得タルヤモ知ルヘカヌ然ルニ事無キ
アサリハ當時保安ノ措置ニ怪ハトク亦如ク領ルノ違フテ實情大酌量
スルカアリト雖モ聊カ注意ノ關スル所アリシヲ惜マサルヲ得ス依テ本項
ニ關スル訓誡ヲ以テ將來ノ注意ヲ促カヌル至當ト認ム

(ハ) 艦長ノ執リタル防觸手收書時ノ状況ニ照シテ通書ト認ム

(三) 野分當直將校責任

(イ) 野分當直將校力其當直中發生シテ操縦員(機師)交心ハ付カサリト部下監督不存屈ノ責ヲ免シ難ト雖天當時旋回砲附近ニ在リテ專ラ前方ヲ監視シテ信船長ト公務ニ関シ談話中ニ偶生シタルモノトシテ艦首ノ偏移アリ之ニ對付スル辨達其間分秒ヲ存スル(過)キサルカ故ニ之ヲ察見ノ遅速ヲ操ス共稍難ニ失スルヲ免シス依テ情狀ヲ酌量シ後來ヲ誠ニ以テ足知信ス

(ロ) 艦長カ艦首ノ動搖ニ依リ急ニ自ラ艦ノ操縦ヲ始ルマ當直將校モ亦之ニ警覺ス

「西艦ニ寄セテイケナイトモツク艦輪ノ傍ニ赴キ初テ操縦者ノ中島等水手ニテ固有操縦員ノ不在ヲ覺知シタル次第トシテ其際直ニ其方ヲ艦長ニ報告スル其ノ執ルマ當直ノ義務タルハ艦長ニテ其報告ニ據ルハ爾後ノ平敗ヲ請スル當リ當直ノ方情ヲ察見シ或ハ獨斷テ木然ニ防止シ得ルヤモ未ダ知ルカラス左トハ其警告ナリトハ當直將校トシテ補佐ノ任ニ關スル所ナト云フヘカシクモ咄嗟ノ際多クは其(カ)ラズルカ故ニ本道

毎 頁

0769

南シキ赤訓誠シカク注意ヲ促スラ至當ト認ム

(ハ) 艦長ノ操縦中其辨令ニ應シ未熟ナル操舵者ヲ指導ヲ監督スル等

其過チ多クナレムルニ努メ依テ以テ損害程度ヲ甚シキに至ラシメタルハ

當直將校ノ責務ニ在リテ其責ヲ免レ得ルニ至ラズト認ム

(四) 白雪艦長ノ責任

白雪艦長ハ本件發生當時ニ艦長室アリ野分ノ脱列等ニ關シテハ何

等報告ヲ接セス觸衝ノ振動ヲ感シ始メテ甲板ニ出テ其事件ヲ同知シタ

ルモノニテ本件ノ關シテ何等責任ノ同クキモノナレト認ム

(五) 白雪當直將校ノ責任

白雪當直將校ハ野分ノ運動ノ異常ナルヲ認メタル時舵故障ト判

断シ其儘直進シ續テ野分ノ取舵ニ回頭スルヲ見テ故障復旧列ノ入ラシ

ト信シ來リ白雪右舷船尾ニ近接セルヨリ急ニ危険ヲ感シ面視一杯ニ

轉舵シ觸衝ヲ免レント努メタルモノニシテ咄嗟ノ際ニ於ケル判断並ニ所置トシテ

0770

南當ニシテ其レ以上ヲ望ミ難シト認ム然レトモ當初野分ノ運動ノ異
常在ヲ見テ能故障カレト判断セシ時直ニ艦長ニ報告スルノ手続ヲ
執ラザリレハ當直特校トシテ其手続ヲ盡ササルノ責ヲ免リス依テ訓戒
ヲ加フルヲ以テ南當ト認ム

(六) 野分操艦員與一等水兵ノ責任

與等水兵ハ當直中下痢ヲ催シタル際次直者又ハ他ノ操艦員ヲ呼ビ交
代スルキニ拘ラス未熟ニシテ其配置ニアザル南當番ト交代シ刺サレ之ヲ當
直特校ノ報告モス馬ニ西艦ヲテ觸衝スルノ動機ヲ生セシタルハ其責重大
尤モイト云ハサルヘカラス

然トモ交代ニ際シ一應中島一等水兵ニ其操艦ノ因スル経緯ノ殆毎ヲ留メ
ト必要ヲ注意ヨ與ク其持場ヲ去ルル外々々ハ暫時交代者ノ操艦操リシ
監視シ厠中ニ在リテモ眼ヲ窓外ニ配リ隣艦ノ燈火ノ移動スルヲ見テ驚
惶トシ艦橋ニ馳セ戻リタルカ如キ行為アリ察スルニ同人カ自己ノ職責ヲ

輕シト怠慢放縱ト別ト規程ヲ重視シ壇ヲ去リタリト認ムル聊
 カ苛酷ニ失スルト云スク恐ラク中島軍水兵ニテ其操縦上ノ自信ヲ
 告ケシハ彼レハ時ノ苦痛ヲ忍ビ次直員ノ乗ルヲ待テラト其ノ行爲ノ跡
 リ見テ之ヲ推定スル難ラザリ加テ午前五時ハ恰モ次直者トノ交代期ナ
 ルニ拘ハラズ統領起床時ノ遠カラサルヲ鬼ヒ自ラ奮起テ其任務ヲ継
 續セント決心シカカ如キ同僚相輔ルノ意氣モ自ラ其向ニ認ラレ
 一此ノ友情偶彼ト禍ヒスルニ至リタリモ見ルハ規程ニ免モ尙寧モ氣
 毒感ナク能ハス而シテ其ノ中島一等水兵ノ言ヲ過信シ之ニ代理ヲ託スル
 ニ足ルトナレ何等其ノ旨ヲ上官ニ申告スルコトナクシテ其ノ持場ヲ去リタル
 一事ハ毫モ許ヌコトナリ凡則行爲ナルコト勿論在モ然レモ判断モ其ノ
 屈出ヲ爲サカリシハ其ノ意思ナカリシニアラスト人倫ノ高直將校ヲ旋回砲
 前方ニ於テ信稱長ト誘治中尤モ遠慮シタルト事故ノ下痢ニ基ク
 爲メ羞耻ノ念ニ制セラレテ理性ノ力ヲ失ヒタルコト認メ得ヘク斯ル心理狀

洋 頁

0772

態ハ教育程度ノ高カキナル彼等ノ間ニ往々見ル所ナリ要スルニ其行
爲ハ施イテ重大ナル結果ヲ來タシタルガ故ニ嚴罰ヲ加フルヲ至當トセンモ
其ノ茲ニ至ル當時ノ事情ト動機トヲ察セバ多少斟酌ヲ加フルノ餘地アルカ如シ
以上理由ニ依リ海軍懲罰令第九條第七項ニ照ラシ懲罰處分ニ
附スルヲ至當ト認ム

(七) 野分操舵交代者中島一等水兵ノ責任

一等水兵中島愛之助ハ曾テ驅逐艦朝潮ニ於テ操舵セシコトアル故
自ラ操舵ノ能アリト信シ交代シタルモノニシテ操舵員ニアラサルニ許可ナク
依頼ニ應ヒタル規則上不都合ノ点ナキニアラサルモ畢竟一時ノ急分別ヨリ
義侠的ニ代理シタルモノニシテ自ラ憚ルノ足ラサル寧ろ憐れムヘキモノアリ
依テ相當ノ訓誡ヲ加フルヲ以テ足リト認ム

(八) 野分操舵交代者繁田三等兵曹ノ責任

中島一等水兵ト交代セシ繁田虎考ハ交代ヲ依頼セラレシ際全ク経

0773

駭ナキ故ヲ以テ一應之ヲ謝絶セタリト雖モ再三ノ哀願傳ルルニ忍
ヒス止ムヲ得ス裏面的ニ交代シタルモノニモテ自ラ操縦スル能ハス
ト信セハ當直將校ニ其ノ狀ヲ報告スヘキニ其ノ手續ヲ誤リタルハ
畢竟鬼意分別ノ足ラサルノ致ス所ニシテ其ノ行爲ハ咎ムヘキ点
ナキニアラサルモ其心情ハ大ニ諒トスヘキモアリ依テ向後ヲ戒ムルヲ
適當ト認ム

右査定ス

0774

別紙第五

大正四年五月二十九日於鎮海海軍艦鹿島

第二艦隊司令長官名和又郎

第一艦隊司令官近藤常松殿

驅逐艦隊司令官白雲觸衛事件處分案件

本件之關之別冊查定書ノ中報ヲ適當ト認ムルニツキ夫々
責任者ヲ處分セシメ尚第九驅逐隊司令對之將來ヲ誠告
ニ具旨報告スヘシ

右訓令ス

欽

海軍

0775

懲罰書渡書

海軍大尉 初田甚三郎

其ノ官ハ野分驅逐艦長トシテ大正四年五月十日午前六時
 馬鞍群島錨地ヲ發シ野分白雪、松風、航行序列ヲ以テ
 旗艦利根ノ左斜後第四隨伴隊形厚速力十四節針路
 北七十五度東ニテ佐世保ニ向ケ航行中同月十二日午前五時其ノ
 官ハ當直交代ノタメ艦橋ニ立リ當直將校海軍中尉日野昇一
 ヲリ未ダ四圍ノ狀況ヲ聽取セザルニ先ケ午前五時四分同艦々
 首約ニ點右舷面頸セルヲ認メタレヨリ直ケニ「取舵」ヲ人々ニ定
 位置ニ執カシメントホシタリ當時恰モ當直揮舵員掌帆兵海
 軍一等水兵奧第之助ハ下痢ヲ催シタレタメ傍ニ立リレ當直
 海軍一等水兵中島愛之助ニ臨時交代ヲ依頼シタル儘當

0776

直將校ニ其ノ旨報出スレテ上厠シタルヨリ中島一等
水兵代リテ操舵シ居タルモ同人ノ技術未熟ニレテ且ツ當時海
上進波アリレカ故適當ナル操舵ヲナスコトヲ得ス為メ同艦ハ面
舵ニ偏シ右翼列ノ先頭ニ在リテ並進シ居タル神風高ヒタル以
テ其ノ官ハ操舵員ノ交代ヲ命ジ同時ニ「取舵一杯」ト令シタリ
其ノ際海軍三等兵曹繁田虎彦當番交代ノタメ艦橋乘
リタルヲ以テ中島一等水兵ハ同人ニ操舵ヲ譲リタレトモ繁田三
等兵曹モ亦操舵術ニ經驗ナカリレタメ其ノ官ヨリ「取舵一杯」ノ
令アリレニ拘ハラヌ謬テ面舵ヲ取リタリレカ當直將校ノ注意ヨリ
直ニ取舵一杯ニ操舵シ右翼列ニ番艦初霜ト約五斗米突ノ
距離ニ於テ漸ク並進スルヲ得タリタルヲ以テ其ノ官ハ「戻セ」ト令
シ利根ノ艦尾ヲ正艦ニ見テ更ニ「宜候」ト令シタリ然レトモ同
人ノ周章ノ結果其ノ官ノ令スルカ如ク適宜ニ操舵スルコト能ク

0777

為ニ番艦白雪ニ接近スルニ至リタルヲ以テ其ノ官ハ直ニ面艦
一杯ト令レ同時ニ右艦機械ヲ停止セシメ續テ兩艦機ヲ後進原
速カトナレタルモ尙前進情カアリシタメ午前五時九分推側位置
北緯三十三度三十分東經百二十七度三十四分ニ於テ野分ノ艦首
左舷側ヲ以テ白雪士官室右舷側ニ觸衝シタリ是ヨリ先キ白雪
當直將校海軍中尉後藤鐵五郎ハ野分ノ接近シ來ルヨリ
面艦一杯ヲ令レ以テ觸衝ヲ避ケント企テタルモ時期既ニ過ク
之レヲ避ケル能ハス爲メニ兩艦逐艦共各修理費約五百五圓
ノ事日教七日ヲ要スル程度ノ損害ヲ受クルニ至リタルモナリ
按スルニ操艦員カ其ノ配置場所ニ去ル方リキハ當直者若クハ
他ノ操艦員ヲ以テ自己ト交代セシムヘキヲ執務中偶下痢ヲ
催シ上廁スルカ爲メ操艦ノ技術未熟ニシテ而カモ其ノ配置
アタル當番ト交代レ且是レヲ當直將校ニ報告セザリシト

0778

其ノ官カ當道將校ト交代セシムル方リ固有操舵員カ操舵
 レ居ラサルニ氣附カ唯艦ノ偏移ノ大ナル見テ取舵ヲ令シ
 其ノ偏移益々甚シキニ至リテ始メテ固有操舵員カ操舵
 ニ從事シ居ラサルヲ知リテ雖モ尚附近操舵員アリテ監
 督シ居ルヲト謬信シ操舵員ノ交代ヲ命ジタリ却テ未^増其
 ノ術ニ經驗ナキ當番ト交代セシタル結果ヲ生シ其ノ努力モ
 水泡ニ歸シタルノミナリ偶々テ觸衝ヲ未然ニ防止シ得ハキ際急
 果斷ノ所置テ出ル機會ヲ失シタリトハ本件發生原因ニシテ
 其ノ官ノ執リタル防觸ノ手段ハ當時ノ状況ニ照シ適當ト認
 定モ其ノ一ラニ艦首ノ偏移ニ依リ操舵員ニテ一水兵ノ船輪ヲ
 握レルニ氣附キ從來未ダ曾テ之レトキ異常事ヲ實ニ看取シ
 ル以上更ニ進ミテ現状ヲ急直ニラ當然採ル順序ナリトス
 而シテ其ノ結果操舵員附近ニ在リテ知得ハ適切ニ應急

手段モ自ら念頭ニ生マヘキカ故或ハ禍ヲ未然ニ防キ得タルヤモ
知ルヘカラス然ルニ事茲ニ出テサリレハ當時保安ノ所置ニ忙シク
他ヲ顧ルノ遑ナリ情状大ニ酌量スヘキモノアリト雖モ聊注意
ノ欠クル所アリレテ惜マサルヲ得ス操舵員ガ自己ノ職責ノ極メテ重
大ニレテ其ノ服務規則定マモ熟知シテ固有ノ配置ニテ
ル未熟者ト交代シ而シテ之ヲ當直將校ニ報告セヌ又當番ノ操
舵ノ經驗ニ乏シキニ拘ルマエ慢然已トシテト交代シ重大ナル
自己ノ責務ヲ輕ンルカ如キ形跡ヲ留メ延イテ艦艇ヲ觸
衝セシムルニ至リタルハ縱令當時如何ニ事情如何ニ動機アリ
リレモセヨ其ノ官廳逐艦長トシテ部下ヲ監督指導シ職
責上其ノ責ヲ免レサルモノナリ

右ノ行為ハ海軍懲罰令第九號第十號ニ該當ス仍テ
同令第十條第十二條依リ謹慎三日ニ處ス

0780

但謹懐中ハ艦内ニ於テ勤務ニ服スヘシ

大正四年六月三日於鎮海

第九駆逐隊司令心得有田秀通

海軍

0781

元驅機密第一八三號

懲罰言渡書

鹿島縣平民驅逐艦野分兼組佐第一番七號

海軍一等水兵 奥 榮之助

明治廿年十一月生

右天正四年五月十日午前六時當隊馬鞍群島船地之發之野分白雪
 松風航行序列及び有連力十四針針路北七十五度東より佐保
 白航行中五月十日午前四時當直操舵員ト勤務中急下崩
 寸催多ク為上崩之際次直者ト他操舵員ヲ呼ヒ交代スキ
 拘メ末點ニ其能置マザル當番ト交代ノ制サレ之當直操舵
 報生ト又為大野分驅逐艦長ト操舵繼ノ困難ニ陥ラ野分
 白雪兩驅逐艦ヲ觸接スルノ動機ヲ生セシメタル海軍懲罰令第
 九條第三十七號該當ス仍舊令第十條第十四條ニ依リ禁

海軍 臣

足二十日之慶ス

大正四年六月三日於蹟海

第九駆逐隊司令 徳方 田秀通

0783

軍令部

艦政本部

軍務局

供覽

大正四年 六月 廿三日 午後八時 廿五分 本局 著

受信者 大臣

電報譯

發信者 第十艦隊

二十九日赤坂町榎西運輸施行ノ際本橋樑高壓滑頭
裏金おウルト折損シ同橋高壓シリンドルニ亀裂ヲ生ズ
後工及修繕ニ長支リ後工期日未定

局員

第四部
第三部
會計課



有外



(根本物)

7-3

官

0784

7/5-1

海軍

四 務局接受

電 報 着 信 紙

局 着		局 發		名氏所居人信受	
取扱者	受信 付午後 八時五分	付午後 二時 分	第 二 月 廿 日	第 二 局	官報
指 定		事 配		番着 號信	
二 九 七 〇		二 九 七 〇		名氏所居人信受	
コ ウ マ テ エ キ ム		カ イ コ ウ ア カ ス ホ ト キ		第 四 五 號	
印附日信着				一 〇 分	

0785

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受	
取扱者	受信	付午後	付午後	第	官報	2	
	後前	時	時	月	局		
	分	字	分	日	號		
3-11 3-12 3-13 3-14 3-15 3-16 3-17 3-18 3-19 3-20 3-21 3-22 3-23 3-24 3-25 3-26 3-27 3-28 3-29 3-30 3-31						定 指	
						事 記	
番着 號信		數紙	名氏所居人信受				
		第 四 六 號					
印附日信着							

0786

報 着 信 紙



局 着		局		發		名氏所居人信受	
取扱者	受信	付午後	付午前	第	軍務局	官報	
	時分	時分	時分	月	日	局	
<p>九月九日 大隈首相官邸</p> <p>避難中ノリ民及ハ漁民ハ救助セラル</p> <p>ハシハソウニニキウ</p> <p>ニヒトニキウ</p> <p>コノカノコ</p>						定指	
						事記	
						番着信	第 二七 號
						數紙	
						名氏所居人信受	
						印附日信着	
						4. 9	

0787

11

供覽

軍務

軍令部 濟

大正四年 九月

八日 午後八時二十分 夕 局發
八日 午後十時二十一分 局着

受信者

海軍大臣

發信者

大湊要港郵局

電報譯

本日午後二時十分 尻矢漁民二十八名 運船
三隻 三子 魚油 西油 岸ヨリ 沖合 漂流セル
与尻矢 望樓ヨリ 報告アリタリ 職ヲ 救助
ノ方急派ス

行動 濟

海軍

0788

軍務局

艦政本部

會計課

第一部

大正四年九月十日

横須賀鎮守府司令長官 伊地知季珍

海軍大臣加藤友三郎殿

局長

驅逐艦梅之関スル件

横須賀海軍工廠造兵部ニ於テ修理中ナリシ霧島

雷工事完成ニ付九月八日午前八時四十五分

山下茂太郎監督ノ下ニ造兵部魚形水雷

艇ヲ射場ヨリ試發セシ魚雷豫定ノ位並ニテ停止

セシ第三區碇泊中ノ驅逐艦梅ニ衝撃シ大

幅三十吋高二十三吋ノ破孔ヲ生シタルニ付同

大臣官房
軍務局接受

0790

9.14
一部發

18

午後二時第一船渠ニ入渠復旧工事ニ着手来十
八日竣工出渠ノ豫定ノ旨黒井横須賀海軍
工廠長ヨリ報告有之候
右報告ス

③

0791

軍務局



司令

大正四年十月八日午後十時五十分 海軍局發

受信者 海軍大臣

電報譯

發信者 大要了令及以理

曙今朝之時 漕 難 英 呂 商 船 棄 負 救 助
一 為 出 港 一 昨 夕 漕 難 船 棄 負 中 吐 氣
短 艇 之 子 辟 難 中 行 衛 不 明 者 ア リ ト ノ
報 接 之 漕 棄 一 為 今 朝 才 六 十 六 號 水
番 艇 ヲ 海 峽 方 向 之 派 遣 せ り

(3)

花崎納

0792

軍務局

秋山

大正四年十月五日

日 午九時五十分 号 海軍局 發
日 午十時十分 号 海軍局 着

發信者 初雷 駆逐艦長

受信者 大佐

電報譯

二月五日 午五時六分 初雷 春風ニ御

実初雷 艦首曲折 艦首区 劃ニ浸水

了 本日入渠 十月六日出渠 豫定

(了)

海軍

0793

供覽

司法

軍務局

人事局

司令長官

参謀長

幕僚

一七七號 十月十九日 進達

大正四年十月十日於

十一月三日

第一艦隊司令長官吉松茂太郎殿

初雪春回觸衝事件

大正四年十月廿九日出佐沖。於初雪春回觸衝事件。聞當時

ノ状況原因損傷ノ程度等取調候。別紙兩艦之長提

出ノ始末書ノ通りニテ重ル原因ハ初雪艦機故障ノ為ナリ

雖ニ事故發生後ニ於テ急遽海軍進修部機務課ニ通報シ初雪艦長澤肇少佐神谷

京艦機操縦通常事ノ受觸衝ノ原因ニテ調査其責任ヲ免ル能ハス

ハ初雪艦機ノ思料致候之十月十日附勅令第一〇六號ニ據リ其

懲罰ヲ免除候事ニ對シ篤ト罰戒ヲ加ヘ置キ候

右報告ス

機務課 二四七



0794

12

海軍

春風驅逐隊 三四号

大正四年十月三十日

春風驅逐隊長 村上正之助

第六驅逐隊司令 増田幸一 殿

網漁事件ニ関スル件

初雪對春風驅逐ニ関シ調査ノ結果別紙始末書及

ニ損害箇所ヲ通リニテ

右報告ス

(別紙ニ葉添)

(終)

0796

始末書

春風來經海軍中尉 岩越寒季



大正四年十月二十五日土佐沖航行中（針路西南西、速力二三節、陣形後尾、第四隨伴隊形）午前二時四十五分三番艦初雪ハ舵機ニ故障ヲ生シタルモノノ如ク急ニ右方列外ニ出テタリ依テ本艦ハ初雪ニ續航スレゴトヲ止メニ番艦時兩、續航スル様運用シタリ三時半頃初雪カ本艦ノ右舷後方約千五百米ニ近ツクヲ見テ時々本艦船名符ヲ信号シテ所在ヲ知リ易カラシメ尚ホ初雪ノ定位ニ就クニ便ニスル為メ針路ヲ稍左ニ取リテ列ノ左方ニ避ケ且ツ回轉二十（二五節）ヲ減シテニ番艦時兩ト

離ヲ約千米、開キ航行セリ

四時頃初雪ハ本艦ノ右方約百二十米ヲ並行ニ進ミ来リ其
艦首本艦ヲ橋ト並ヒレ頃突然針路左偏シテ本艦針路ト
交叉スルヲ認メタリ是ト同時ニ「舵故障、取舵一桝」ト云フ聲
ヲ聞キタレハ直ニ取舵一桝ヲ命シ續ヒテ「ゴースタン原速」ノ
聲ヲ聞キタレハ直ニ汽機回轉ノ增加ヲ令シ左前方ニ避ケントシ
タルモ四時七分逐ニ初雪ノ艦首ハ約四十五度ノ角度ヲ以テ本艦
右舷後部舷門附近ニ衝突シタリ
依テ直ニ艦長ニ報告スルト共ニ防水ノ号音ヲ吹カシメ自ラ
「防水幕出シ方、右舷後部」ト令シ機械ヲ停止シ舵ヲ中央
ニ戻シタリ

0798

當時ノ天候陰暗シテ時々雨降リ月影ヲ認メス

風向北東(艦尾) 風力五

海上波浪高ク長濤艦尾ヲタタキ時ニ汽機ノ空

轉スルコトアリテ舵ノ利キ方少ナク艦ノ操縦困

難ノ感ス

觸衝時前ノ艦位

△春日

△朝風

○子日

○若葉

○潮

←250

○春風

△初春 時雨

○初雪

○信乃重三

(終)

0799

驅逐艦春風損害箇所調

損害箇所

数量

記

事

一、右舷側外飯

四枚

舷門附近に於て水際ニ接シ高サ三呎長サ一呎半最深部約一呎ノ縦ニ二箇所ノ四所ト上甲板接シ長サ二呎高サ三呎ノ屈曲部ヲ生ジ外飯三枚ニ且ル間ハ大彎曲ヲナシ緩波状ニ屈曲ス
右舷スクリーナーガド附近ノ外飯ニハ水際ニ接シ高サ三呎長サ三呎深サ約二呎ノ高平丸四所一箇所アリ
(別圖参照)

三、右舷機取付用金物

一個

外飯ニ取付ケル六本ノボルトヲ切斷シテ下方ニ屈曲シ機構吊垂用堅金ハ前部ニモ切壞ス

三、上甲板ハツツシ

一箇所

右舷舷門附近に於テ長サ十四呎ノ間折損離脱ス

四、ロールスタンション

四本

右舷舷門附近ノモノ内方ニ屈曲ス

五、右舷スクリーナーガド

一個

尖端ヨリ約二呎ノ所ニテ下方ニ約直角ニ彎曲ス

六、後橋

一本

初層ノエレキスタンプニ依リ右舷前方ノスタンプヲ押サレル為メ後橋ハ上端ヨリ六呎長サ十呎ノ所ニテ三段ニ折壞ス

七、士官室右舷新部履台

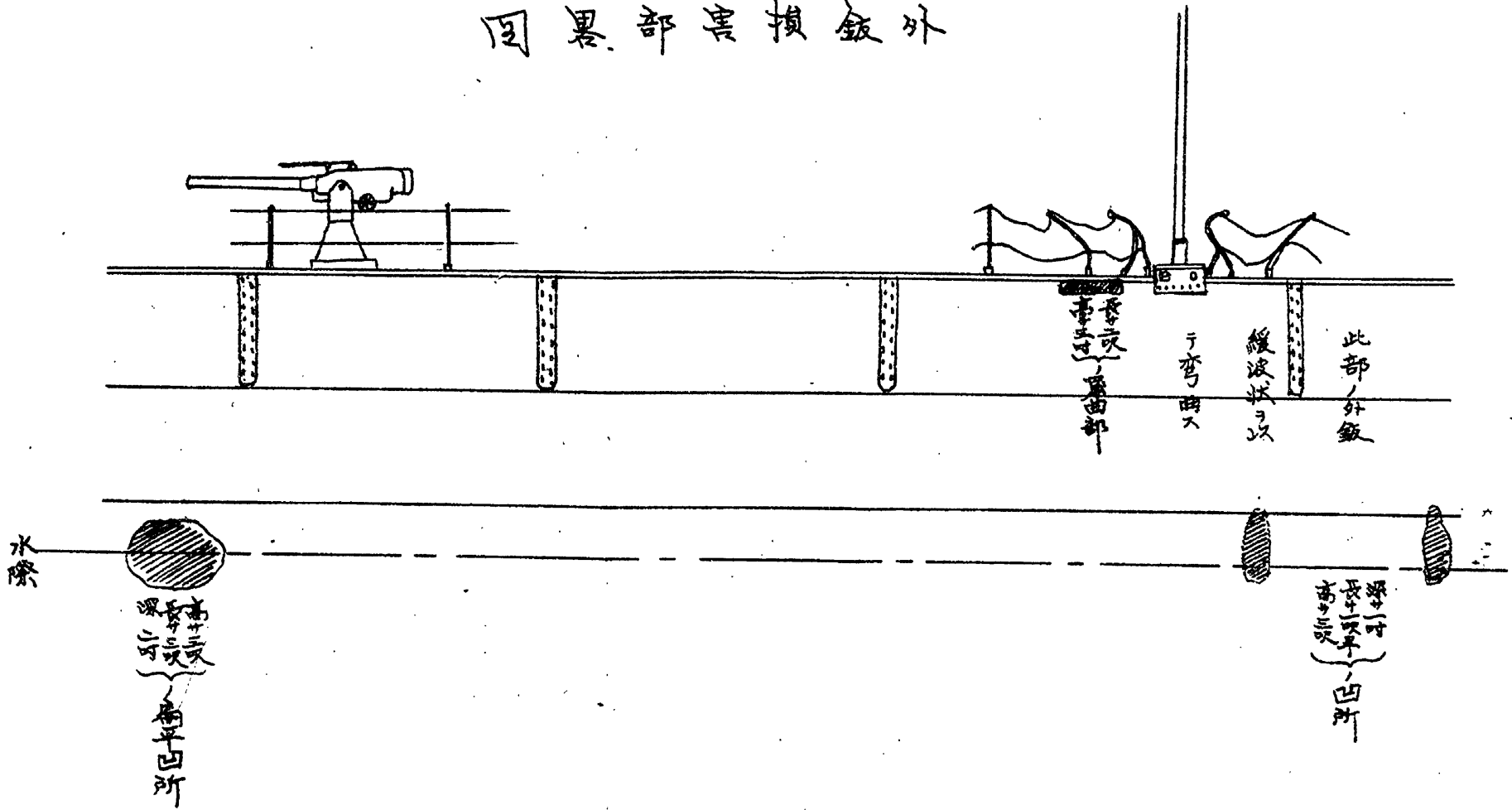
一個

外飯傷傷内方ニ押サレテ為メ算筒中央ノ木部折壞ス

海軍

0800

外鉸損部異圖



0802

皇海軍参参辨

大正四年十月廿八日

初雪駆逐艦長海軍少佐 神谷 京

第六駆逐隊司令海軍中佐 増田 幸一 殿

一 駆逐艦初雪 春風 衝突始末書

一 右

一 右

一 航海日誌 拔萃

一 機関日誌 拔萃

一 駆逐艦初雪 艦首撮影写真

右 提出ス

全但海軍尉松本初撰

全但海軍中佐増田幸一撰

三葉

了

海軍

0803